

事例 15 小学校のOJT実践事例

特別支援教育の視点から通常の学級の担任を支える

【特別支援教育コーディネーターとして】

近年、本校において若手教員が多くなってきており、支援が必要な児童への指導について悩みを抱える学級担任も増えている。そのような悩みを解決するために、支援が必要な児童へのかかわり方や授業の在り方についての研究を進めてきた。その中で、特別支援教育コーディネーター（以下、コーディネーター）として、特別支援教育の視点から、通常の学級の担任を支える取組を行った。

〈取組の内容〉

○支援が必要な児童へのかかわり方を一緒に考える

教職5年目の学級担任が研究授業を行う際に、一緒に授業づくりを行った。担任は、支援が必要な児童に対して「授業に集中して取り組めるようになってほしい」という願いをもっていただけ、教室の環境整備や座席の配置などを一緒に考えた。また、その子のよさを授業で生かす手立てなどについても助言した。担任がこれらの取組を実践すると、児童は授業に集中して取り組めるようになり、発言もみられるようになった。一人の児童に焦点を当てて考えた手立てであったが、実践してみると、他の多くの児童にも有効な取組であることが分かり、学級のユニバーサルデザイン(以下、UD)化にもつながった。

また、若手教員だけでなく経験豊富な学級担任からも相談を受けることがあった。学級内に支援が必要な児童が複数名おり、対応が難しいとのことであった。そこで、授業の様子を参観し、放課後、一緒にかかわり方を考えた。相談を重ねる度に、担任のかかわりや言葉掛けの仕方が工夫されていき、関係する児童が成長していく姿がみられた。

○全職員に向けて発信する「校内支援便り」

普段から、できるだけ多くの児童や先生方とかかわりたいのだが、特別支援学級を担当しているとなかなか難しい。そこで、「校内支援便り」を学期に1回発行している。時期に合ったテーマを選びながら、特別支援教育について発信し、全職員で学ぶ機会を設けた。新しく着任された先生には、バックナンバーも配布して、全職員の理解に努めている。

これが成功の鍵！

②ほめる、認める、達成感を与える

学級担任の願いを大切にしながら、「こうしたらどうか」と提案しています。

また、先生方のかかわりや声掛けの変化を伝えたり、児童の変容と一緒に喜んだりすることを心掛けています。

⑤得意分野や指導力のある教員から学ぶ場をつくる

「校内支援便り」では、特別支援教育の考え方や具体的な手立てを紹介しています。

また、特に困っている教員には、放課後に職員室で相談に乗っています。

【若手教員の声】

学級での指導に困った日は、放課後、必ず相談にいきます。学級の様子や今後どうしていきたいかなどを共感的に受け止めてくれるので、安心して相談できます。

また、自分が気付かないような支援の仕方を教えてくれるので、分からないことは何でも聞きたくなります。とても頼りになる先輩です。

【コーディネーターの声】

毎年新任者が赴任するようになり、教員全員で特別支援教育について学ぶ機会が必要だと強く感じるようになりました。

先生方には、支援の心構えとして「子どもの困難さを理解し、その子なりの伸びを助けられるように、その子が安心して学べる環境を整えていこう」と伝えています。



職員室での相談の様子

〈取組の成果〉

- ・若手教員が一人の児童への指導や支援の方法を学ぶとともに、UDに配慮した授業を行うことで、対象児だけでなく学級全体がスムーズに学習に取り組めるようになるなど、授業力が向上した。
- ・多くの教員がコーディネーターの助言により、特別支援教育の視点から児童をみられるようになった。特に、一人一人に応じた言葉掛けを心掛けたり、普段かかわりの少ない児童への言葉掛けや支援などを積極的に行ったりするようになった。